

## 高校入学後三カ月で中退

河尻しのぶさん（二六歳）はS市の郊外出身。母親が二二歳の時の子どもだった。

中学一年生の時、両親が離婚。しのぶさんは兄と一緒に母親に育てられることになった。母親はS市中心部の繁華街で水商売の仕事をしながら、しのぶさんたちを養っていた。

中学卒業後、しのぶさんはS市内の公立高校普通科に進学。偏差値は三〇台で、いわゆる底辺校と呼ばれる高校だった。

S市のある県の高校中退率は一・三％（二〇一六年）であるが、学校によっては一年生の夏休みまでにクラスの人数が大きく減ってしまうところもある。しのぶさんも、入学してわずか三カ月後に中退した。

「母親から『高校には行った方がいい』と勧められたので行っただけですが、すぐにやめてしまいました。周りにも中退する子は多かったです。学校に行くよりも自分で働いてお金をつくって、お給料で欲しいものを買ったり遊んだりしたかったです」

二〇一七（平成二九）年にS市が実施した「子ども・若者のいる世帯の生活状況等に関する

調査」によれば、世帯収入が貧困線未満の母子世帯では、母親の七・三%が中卒であり、大卒はわずか四・六%。生活の苦しい母子世帯で育った子どもが進学に対するイメージや意欲をうまく持てない背景には、こうした事情もある。

高校中退後、しのぶさんは一八歳までS市内にある居酒屋とアパレルショップでアルバイトをした。一八歳になってからは、実家を出てS市内で一人暮らしを始めた。

「母親との関係が悪くて。束縛されるのが嫌だったんです。ずっと家を出たいと思っていました」  
一人暮らしを始めてから、しのぶさんは母親と同じく水商売の仕事をするようになった。

「S市の駅前や繁華街、B市、C市、F市……いろいろなお店で働きました。多い時は、週六で勤務していました。二〇時から二一時の間に出勤して、深夜二時まで。店は三時頃に閉店するので、出勤時間は五時間くらい。時給は平均二〇〇〇円ちよいなので、一回の出勤で一万円くらいもらえました。

そのお店は、個人個人の売り上げに応じて時給がアップする仕組みでした。あとは歩合。指名をいっぱい取れば取るほど、もらえるお金は増えました」

## 地域に広がるキャバクラネットワーク

S市の東西には、それぞれ人口約九万六〇〇〇人のB市とC市がある。また高速道路で三分程度の距離には、県庁所在地であるS市に次いで人口の多いF市（人口約二六万八〇〇〇人の中枢中核市）がある。

県内で営業している大手のキャバクラやデリヘルグループはそれぞれの街に店舗を構えているため、在籍女性は自分の都合に合わせて、「今週はS市、来週はF市、再来週はC市」といった形で、好きな地域で働くことができる。地元では働きづらい事情がある女性、それぞれの地域で「最近入ったばかりの新人」として稼ぎたい女性にとっては有り難い仕組みだ。

しのぶさんも、S市だけでなくさまざまな地域の店で働く形を選んだ。しかし、一八歳という若さでキャバクラに週六出勤というのは、身体的にも精神的にもかなりのハードワークではないだろうか。

「お金のためって思ったり、仕事が終わって友達と遊ぶことを考えると、別に大変とは感じなかったです。

朝に仕事が終わって、家に帰って寝て、お昼に起きる。そして友達と遊びに行って、また夜

は仕事……という生活でした。

仕事で稼いだお金の使い道は、家賃の他は友達と買い物や飲みに行ったり、県外に遊びに行ったりして使うことが多かったです」

キャバクラで得た高収入を活用して友人たちとの遊びに興じ、一人暮らしと自由を謳歌する日々。住まいは、時期に応じてアパートと実家の往復を繰り返していた。

## 二四歳で妊娠

こうした生活の中で瞬く間に時は過ぎ、しのぶさんは二四歳になっていた。高校や専門学校、大学を卒業していれば、既に社会人としてのスタートを切っている年齢だ。しのぶさんは学歴も職歴もないまま、一八歳の頃と同じようにS市の繁華街で働き続けた。

そんな時、仕事関係の飲み会で三〇代半ばの男性と知り合った。彼の仕事はキャバクラのボーイだった。出会ってから数カ月後に交際を開始。その半年後に、妊娠が発覚した。

「妊娠したことは、相手の男性には言わなかったんです。自分で妊娠検査薬を使って検査して、病院にも行ったんですが、その後で彼に言うことが怖くなってしまっ

その前にも別の男性の子どもをおろしたことがあって。二四歳になって、またおろすのは申し訳ない、産みたいという思いがあつたんです」

結局、しのぶさんは相手の男性に妊娠の事実を伝えることはできなかった。病院に行つてから数日経つた時、しのぶさんの方から男性に別れを告げた。

突然の別れの言葉に、男性は何が起つたのか全く理解できない様子だったが、最終的には納得して別れてもらった。

第二章の由香子さんと同様、しのぶさんもまた妊娠が判明した時点で、父親である男性との関係を自ら断ち切つてしまつてゐる。男女共に、妊娠判明による関係性の変化にうまく対応できていない現実が浮かび上がってくる。伝えること自体が困難であるし、伝えられた方が適切な対応をすることもまた困難だ。

妊娠が判明した時点で、しのぶさんはS市内で一人暮らしをしてゐた。母親とケンカをして、実家を出てゐたのだ。

「母親には言いづらかつた。お腹も大きくなつてきたけど、誰にも言えない。どうしよう……と思ひました」

病院には、妊娠が判明した後一度だけ行った。

医師からは「妊娠しています。どうしますか。考えてください」と言われた。それ以降、病院には行かなかった。

妊娠した女性が行政の支援を受けるためには、診断を受けた医療機関で妊娠届出書をもらい、市役所の健康福祉課に届け出て、母子健康手帳をもらう必要がある。母子健康手帳があれば、妊婦検診や医療費助成を受けることができる。

しのぶさんは、妊娠したことを役所に届け出なかったため、母子健康手帳は交付されなかった。結果的に、妊婦検診を受けることもできなかった。

「ネウボラ」は絵に描いた餅？

S市では、「S市版ネウボラへの入り口」と称して、妊娠・出産・子育てに関する相談に対応する窓口を地域ごとに設けている。

「ネウボラ」とは、北欧のフィンランドにおいて、妊娠期から出産、子育て期の親子を、担当の保健師が切れ目なく支援する目的で、地方自治体が実施している長期的かつ総合的な支援制度を指す。

S市役所の窓口には、助産師などの専門職がマタニティナビゲーターとして配置され、医療機関や児童相談所、地域の保育園・幼稚園、民間のNPOなどと連携しながら、不妊相談会や各種検診、育児相談や産後ケアなど、さまざまな支援を行っている。

スマホで使える子育て応援アプリもリリースしており、妊婦向け情報や保育園の入園状況、乳幼児健診や予防接種のお知らせ、子育て関連施設マップなどの情報を配信している。

これだけ制度やサービスが充実しているにもかかわらず、しのぶさんはどの窓口や専門職ともつながることができなかった。なぜだろうか。

その理由の一つとして、行政のサービスが申請主義に基づいていることが挙げられる。つまり、自分で役所の窓口に行って申請しないと、必要なサービスを受けられないのだ。

話しづらい事情を抱えた女性、そもそも窓口の存在自体を知らない女性にとっては、どれだけ行政が支援制度を充実させたとしても、その恩恵を受けることはできない。

最も支援が必要な女性にリーチできない状態では、せつかくの「ネウボラ」も絵に描いた餅に終わる可能性が高い。

### スマホで分娩ぶんべんの方法を調べて自宅出産

彼と別れ、家族とは疎遠になり、検診も受けていない。しのぶさんとお腹の赤ちゃんは、こ

の時点で社会とのつながりをほとんど失ってしまったといえる。

困り果てた人が取る行動は、行政の相談窓口に駆け込むことでもなければ、なりふり構わず誰かに助けを求めることでもない。人間は、困れば困るほど、ただひたすら「今までと同じことをやり続ける」ようになる。

妊娠していることを誰にも言えないまま、しのぶさんは妊娠する前と全く同じように、キャバクラの仕事が続けた。

キャバクラをはじめ、夜業界の仕事には、そこで働く人の現在や過去を問わない文化がある。誰も気にしない代わりに、誰からも気にされずに済む。

誰にも言えない事情を抱えた女性、自分自身を客観視したくない事情がある女性にとって、よくも悪くも働きやすい環境だ。

妊娠九カ月を過ぎて、隠しきれないほどお腹が大きくなった頃、しのぶさんは店長から呼び出された。店長は、しのぶさんの身体を見て「お前、妊娠しているだろ」と言った。

「そのお店の店長には、とてもよくしてもらっていたんです。私の母親のことも知っている人でした。そこで妊娠していることを認めて、店長に相談すればよかったけど、結局言えなかった。太っただけです、と言いました」



妊娠していることに気づいて話しかけてくれた、そして助けの手を差し伸べてくれた唯一の相手とのコミュニケーションを自ら断ち切ってしまったしのぶさんは、誰にも言えないまま、最終的に自宅で、たった一人の状態で出産することになった。

出産当日も、いつも通りキャバクラで働いていた。仕事を終えて、重い身体をひきずりながら家に帰ってきて、ベッドに横になっていると、陣痛が始まった。

これまで経験したことのない激痛の中、しのぶさんが行ったことは、救急車を呼ぶことではなく、「スマホで分娩の方法を調べること」だった。

「分娩の知識は何もなかったもので、昔観たテレビの映像を思い出して、スマホで調べました。血がたくさん出ると思ったので、ベッドにタオルを敷いてカバーしました」

妊婦検診を受けていない一〇代の女性が自宅やラブホテルで出産をする場合、YouTubeなどの動画投稿サイトで出産の映像を検索して、それを参考にしながら産むというケースはある。しのぶさんも、スマホを助産師代わりに活用して出産に臨んだ。

陣痛が始まってから二時間。しのぶさんはたった一人で、女の子を出産した。

「へその緒はハサミを使って自分で切りました。菌とか大丈夫かな……と思ったけど。生まれた赤ちゃんは、最初は全く泣かなかったんですが、背中をトントンしているうちに、やっと泣きました」

どうにか一人で出産を終えたが、目の前には生まれたばかりの新生児が手足を震わせて泣いている。部屋の中は血まみれだ。出産の痛みと疲労で、身体はほとんど動かせない。

これからどうすればいいのか分からない。警察に捕まってしまうのかもしれない。でも、怖くて誰にも相談できない……。

#### 自宅から東京の支援団体に SOS

極度の不安と混乱の中で、しのぶさんは東京で妊娠相談を行っている支援団体にメールをした。

「スマホで検索していたら、その団体のホームページが出てきたんです。電話には抵抗があったので、相談員の方とはメールですとやりとりをしていました。」

相談員の方からは『赤ちゃんがそのままだと、警察も動くし、大変なことになってしまおうので、まずは住んでいるS市役所の人に連絡をしてほしい』と言われました。

また『一人で産んだ場合、誰も出産を証明してくれる人がいないので、胎盤を取っておいてください』とも言われました。

最初は胎盤って何か分からなかったけど、『これこれこういう感じのものだから、それだけは取っておいてね』と言われたので、タッパーに入れて冷蔵庫にしまっておきました」

S市から三〇〇キロ以上離れた東京の支援団体にメールで相談することで、しのぶさんはようやくS市の社会資源とつながることができた。

最終的に、支援団体の相談員がS市役所の担当課と連絡を取ってくれた。S市役所の職員がしのぶさんの自宅を訪れ、そのまますぐに病院に移動。母子共に検査を受けた。冷蔵庫に入れておいた胎盤も無事に渡すことができた。

「生後一四日以内に出生届を出さないといけなかったの、ギリギリでしたね。

病院に行ったら、母子共に健康と診断されました。医者からは『奇跡ですよ』と言われました。若干早産だったかもしれませんが、赤ちゃんの体重は二八〇〇グラムでした。母

「子手帳もやっともらえました」